

廃プラで製造の燃料、ボイラーで利用



蒸気を発生させるRPFボイラー＝関市洞戸飛瀬、秋田屋フーズ洞戸工場

マルエイ、エネ循環推進

総合エネルギー事業を展開するマルエイ（岐阜市入舟町、澤田栄一社長）は、工場から排出された廃プラスチックを主原料に作られた固形燃料（RPF）を、同じ工場のボイラー熱源（蒸気）として利用するエネルギー・ループに取り組んでいる。昨年4月の改正省エネ法施行で、脱炭素の計画策定を義務付けられた事業者らに新たな対策として提案しており、担当者は「中東情勢の緊迫化で重油やガス代は上がる可能性がある。二酸化炭素（CO₂）の排出量を削減できるメリットもあり、昨年から問い合わせが増えている」と話す。（松浦健司）

CO₂排出や燃料費削減

同社は食品加工の秋田屋フーズ洞戸工場（関市洞戸飛瀬）の敷地約350平方メートルに、小型RPFボイラーを設置し、2022年から発生した蒸気を秋田屋フーズに販売している。

エネルギー・ループは、秋田屋フーズから出るストレッチフィルムや食品包材を大和エネルギー（愛知県春日

井市）が回収しRPFに加工。それを秋田屋フーズ内のマルエイのボイラーに入れ、蒸気を発生させて工場での食品製造の熱源として利用する流れだ。

秋田屋フーズは、養蜂・食品製造の秋田屋本店の関連会社。ボイラーの蒸気を工場で製造するゼリー飲料の加熱、殺菌処理工程の熱源にしている。マルエイによると、秋田屋フーズはRPFの利用で燃料費はかつて使っていた重油に比べて、最大2、3割削減できたという。

RPFボイラーは重油とガスを燃焼させるボイラーに比べて二酸化炭素の排出量を削減できるメリットも

ある。マルエイの担当者は「日本ではペットボトルなど素材の循環は多いが、エネルギーの循環はほほ例がない」としている。